

目 次

大学改革の中での図書館 熊田 雅彌 ……1	図書館の利用 川端 邦裕 ……7
館蔵資料紹介No. 19	Letter to the library
『寺山修司実験映像ワールド』について	Hagos Hadush Seged ……7
内田 勝 ……3	職員の異動 ……8
平成6年～10年度附属図書館統計 ……5	お知らせ ……8

大学改革の中での図書館

熊田 雅彌

昨年(平成10年10月)の大学審の答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」—競争環境の中で個性が輝く大学—と今年(平成11年6月)の答申「科学技術創造立国を目指す我が国の学術研究の総合的推進について」—「知的存在感のある国」を目指して—が出て以来、本学においても前者の答申に対応するため、大学改革検討委員会が評議会の下に設置され、教育改革と組織改革についての2つの分科会が検討を重ね、両分科会より中間報告が9月に評議会に提出された。一見順調に「大学」が「答申」に対応しているように思えるが、そこには、場合によってはかなり深刻な問題が内包されている。しかし、まだ、「大学」には巧く対応できるが如き幻想があった。それは、そこまで「大学」が麻痺していることの証左でもあったが、その警鐘が鳴る前に、国立大学の独立行政法人への移行が具体的な姿で9月に遡上した。この問題については、一昨年、既に国大協はもとより、本学の評議会も反対声明を出している。独立行政法人化の問題は、「答申」とは比較にならない深刻な問題があることは言うまでもない。しかし、「大学」にはこの問題に有効な対抗策を講じ得るほどの力

はない。それほど外堀は埋め尽くされ、残された道は「条件闘争」しかないような状況である。「大学の自治」「学問の自由」という陳腐な旗は、この問題に対して全く無力である。「大学」人で進んで独立行政法人化に賛成するものはいないと思える。政治の力に対向し得る唯一の強力な味方と思える「国民」にすら、現状では支持が得られるかどうか不明である。それを象徴する事象は、少子化の問題である。18才人口の減少は本来、出生時に予想される得ることである。しかし、切羽詰まるまでひたすら「大学」は、講座増、学科増等と膨張し続けてきた。膨張政策自体は、全て「悪」ではない。科学技術の進展に伴って、「大学」が教育・研究体制を整備していくことは至極当然であり、社会に貢献すると言う点では積極的に推進すべき政策でもある。問題は、同時に学問分野によっては定員減等、再検討すべき課題があったにも関わらず、有効な政策を検討・立案することが出来なかったことである。要するに、自ら蒔いた種は自ら刈り取らねばならないということである。独立行政法人化が顕在化した現在では、確保した教官定員は重要な「資源」・「財産」であり、これを守り、活用して如何

に有効な改革を押し進めるかが重要なことである。しかし、真の問題はそれが出来るかどうかである、「大学」自身の手で。小さな「村社会」で、長い間”ドグマ”と”無謬性の神話”に染まりきった「大学人」にそれが可能かどうか、極めて疑問であると思われる。これに対して、「大学人」の意識改革が必要であると言われている。この意識改革の内容は、人によって、軸足をどこにおくかによって異なる極めて多種多様なものである。しかし、行く先は”大学に課せられた教育・研究活動という使命を果たすために、活性化、高度化、個性化を目指す”ということ、要するに、使命を果たす機能を如何に創出するかということになる。本来、行政のスリム化に端を発したこと故に、文部省案は拙速であり、「大学」の自浄努力を無視する「外圧」と言っても、結果的には「何時という時間」の問題であり、「効率化」の議論には対抗できない。通則に対して、「特例法」が”国家公務員の身分保障””学長の任免”等で「大学の自治」と「学問の自由」に配慮しているが、問題の本質は、「大学」に最も馴染まない「効率」を持ち込んでいることである。

「大学人」が、今なさねばならないことは、「大学」としての内部の意見調整である。今更という感があるが、部局を超えた教育と研究活動に対する統一したものはない。あるとすれば、抽象化された理念であって、独立行政法人でいう中期目標・計画については皆無である。特に、この種の激変は、自己防衛意識を高め、長期的で、広い視野を失わせがちである。部局としての「特化」にしても、全体としての「大学の特化」の視点がないと、真の改革にはなり得ない。今こそ University を僭称するならば、その意味を考えるべきである。これは部局の数の問題ではない。学生定員・教官数を含めた相互補完を考えるべきである。「専門的」職業人(技術者)の育成ということは、私の所属する工学部でよく使われる「言葉」である。しかし、これほど曖昧模糊とした言葉はない。学生の自主的選択による「専門的」職業は意味があるとしても、大学の教育目標にはなり得ない。旋盤工と言うような意味ならいざ知らず、高等教育を受けた人間の「専門的職業」には、教養教育という次元ではない文理融合の教育が不可欠である。この教育理念の構築こそ、今必要であるから部局間調整機能の確立が必要である。

この様な改革が叫ばれる中で、大学における図書館はどうあるべきか。大学審の答申—科学技術創造立国を目指す我が国の学術研究の総合的推進について—の中でも、大学図書館の電子図書館的機能の整備と充実が強調さ

れている。全ての「情報」が電子化され、インターネットが発達・整備されれば、教官・学生が自分のパソコンから情報量の多い中核的図書館にアクセスして取り出すことが可能になり、規模の小さい地域分散的な図書館は無用になってしまう。全面的な情報化社会の到来は、生活様式等を激変させる勢いがある。だが本来、大学図書館は情報提供という重要な側面と同時に、文化遺産を維持する機能があるべきで、教官の研究成果(論文)は、長期的視野に立つならば、正に文化遺産である。岐阜大学に所属する教官の文化遺産は、岐阜大学で管理・継承されるべきもので、そこに特化された「大学」としての文化遺産が構築される。これは、ある種の「博物館」的機能を求めることになるが、その意味での役割を担うべきと考える。技術的には、情報発信としての機能を付加すれば、社会に「大学」の知的財産の還元という役割を果たすことにも成りうる。本学の50年余という短い歴史では、今直ぐ過大な期待はできないかも知れないが、今後50年、100年という年月を経れば、教官だけでなく、共にその時代を過ごした卒業生にとっても、意味深いものとなるし、それが「大学の存在」の証左と考えられる。岐阜大学が国立大学として産声を上げて以来、組織改編・拡充の歴史は形として、記録として残っているが、この地で過ごした幾多の先輩・学生の生み出した「文化的遺産」は、明確な形では何処にも残っていない。新しい学問的成果・教育システムにしても、過去の遺産があってこそ、その意味があるのであって、そこに不連続性はないと思われる。多くの教官・学生にとって、「大学」は単なる経過点でしかないかもしれないが、全体としての「土着性」がないと帰巢感は生まれにくい。研究成果は個に帰するものであるとしても、その生み出す環境は全体としての中で許容されたものであると意識すべきであり、社会に送り出した卒業生の成果も「大学の成果」として生まれ得たものであると自負すべきと思う。大学改革と言う形の生き残りの「特化」の核にこの様な視点が必要であり、そのシンボルとして図書館の果たすべき役割は大きく重要である。このような観点・意識は、無論今の館長を始め、関係者の中にあるものと思われるが、その点を特に期待したい。

最後に、原稿を依頼された側の期待に則したものが解らないが、「大学」改革の中で感じたことを思い浮かべて綴り、図書館のことを思い書き下したものであることをご理解下さい。

(くまだ まさや:岐阜大学工学部長)

館蔵資料紹介No.19

『寺山修司実験映像ワールド』について

内田 勝

附属図書館本館2階に置かれたビデオテープの棚には、教材中心のビデオ資料に混じって、なんとも毒々しいパッケージが異彩を放つ6巻組のビデオが並んでいる。詩人・劇作家としても知られる寺山修司が監督した前衛的な短編映画を集めた、『寺山修司実験映像ワールド』（ダゲレオ出版、1993年）である。

私がこれらの短編を見たのは、泉鏡花の小説を映画化した寺山の中編『草迷宮』を見に行ったときに、同時上映されていた『消しゴム』（1977年）に出会ったのが最初だったと思う。孤独な老女が、かつて海に消えた夫（または恋人）である若い海軍士官の思い出に浸ろうとするが、彼女の記憶の画像は、スクリーン上に出現した半透明のクラゲのような染みに徐々に触まれていくか、あるいは画面を横切る巨大な手に握られた消しゴムによってぐいぐいと消されていく。

寺山修司はこの映画について語っている。「これは・シミのある映画・の試みであり、消しゴムで消すことのできる映像の試みでもある。（中略）この映画は、記憶の修整の映画でもあるわけで、時間の経過を通して一人の老女のさまざまな過去がよみがえってくる。臉の裏を通りすぎてゆく過去。そのまばたきの一瞬映画。あるいは打ちよせて返してくる波のような時間の皺。そういったものを記録してみたい、というのが、この映画の意図なのであった」（『寺山修司イメージ図鑑』〔フィルムアート社、1986年〕）。

映像じたいが消しゴムや染みに消されていくという実験的な技法もさることながら、冒頭、どんよりした空の下で浜辺に打ち寄せる波を写しただけのショットが、なんとも禍々しい雰囲気を漂わせていたり、白い制服を着た海軍士官がゆっくり振り向いて、なぜか邪悪な微笑を浮かべたり、自らの水死体が砂浜に打ち上げられているのを眺める老女が、ぞっとするほど無表情な顔つきをしていたりといった、細部のイメージの奇妙な美しさにすっかり魅了されてしまった。哀調を帯びたゆったりしたメロディーの背後で、怒りのこもった和太鼓のリズムが激しく乱打される不思議な音楽（J・A・シーザー作曲）も、感傷趣味と過激さの入り混じった映像の効果をさらに高めていた。

それ以降しばらく、寺山修司の映画が上映されるたびに出かけていった。中でも印象的なのは、寺山修司追悼企画の一環として渋谷ジャンジャンで行われた上映会で、『審判』（1975年）を見たときのことだ。映画は板に白いペンキを塗った特性のスクリーンに投影され、その下には何本もの釘と金槌が置かれている。スクリーンに映し出されるのは、道路に五寸釘を打ち込む男、開いた本のページに釘を打ち込む老人、巨大な釘を十字架のように背負う男、男が金槌で釘を打つことによって身悶えする女といった具合である。徹頭徹尾釘だらけのこの映画は、最後の7分間で観客たちが自らスクリーンに釘を打ち込んでいき、白い光が投影されるだけのスクリーン全体が釘に覆われたところで終ることになっている。

ところがこの日は、アナウンスがあってもしばらくは誰も観客席を立とうとせず、ようやくオタク風の若い男女数人がおずおずと歩み出たのだが、彼らはいかにも80年代半ばの若者らしく、実に行儀良く、コンコンと小さな音を立てて釘を打ち始めたのだ。そのあまりの格好悪さに、会場には白けた空気が充満していく。自分だっていざステージに上がれば彼らと同じようにしか打てないかもしれないと思うと、いまさら席も立てない。気まずい数分間が過ぎていった。

その時突然、中年の女性が観客席から立ち上がると、「てめえら何やってんだ！ これは、こういう風にやるんだよ！」と叫び、スクリーンに突進してきた。彼女はそこに置かれた金槌を引つつかむと、その金槌そのものを猛烈な勢いでスクリーンに叩きつけたのだ。他の観客は呆気にとられ、女性が立ち去った後の画面を見つめた。そこにはスクリーンに対して垂直に屹立した金槌が、周囲にちょこちょここと打たれた細い釘たちを威圧するように、映写機の放つ白い光に照らされ、大きくひびの入った板の上に黒々と影を落としている。それはそれで、この映画の終わりにふさわしい映像だった。もともと上映のたびにある程度異なった展開をする可能性を秘めた映画ではあるが、その中でも特異な上映を目の当たりにしたことになる。なんだかとても貴重な体験をしたような気になり、興奮してしまった。

もちろんそうした興奮は、本館3階の視聴覚コーナーのブースに座って『審判』のビデオを見たところで、到底得られるものではない。問題の場面になっても、観客である私はテレビ画面に直接釘を打ち込むわけにはいかないのだ。せいぜい、ビデオ版にはあらかじめ録音された、大勢の人間がスクリーンに釘をガンガン打ち込んでいく大音響をヘッドホンで聞きながら、この映画が本来の形で上映された映画館の情景に思いを馳せるしかない。

スクリーンに映った娼婦たちの挑発に乗せられた観客の一人が、実際にスクリーンの中に入り込んで女たちに身ぐるみ剥がされる『ローラ』(1974年)もまた、ビデオでは面白さが半減してしまう映画だ。この作品が映画館で上映されるときには必ず、森崎偏陸氏の演じる「観客」が、1974年当時と同じ衣裳を着て観客席に座り、切れ込みの入った特製スクリーンをくぐり抜けて映画の外側と内側を行き来するのである。

画面上の娼婦が語っている。実験映画なんぞを見に来るのは、自分でも映画を撮り始めた映画青年か、裸が出てくるのを期待してやって来る出歯亀サラリーマンくらいだ。

「そういうのがさ、暗いなかにはさ、ずらーっと、ほら、ずらーっとならんでるわけですよ。バーっと。ね。壮観だよ」。清潔で明るい図書館の一室でそれを見ている私は、この挑発をどう受けとめればよいのだろうか？ どこかで同じように一人このビデオを眺めている、孤独な観客たちの集団を想像するしかない。そうした観客の一人が、テレビ画面に映る女を目がけてピーナツを投げ込み、やがてビデオの内側の世界に吸い込まれるのだ——そう想像してみても、観客が画面内に入り込む瞬間に立ち会えない物足りなさは残る。

ビデオ版にはこうした限界があるとはいえ、岐阜で上映される機会が多いとは思えない寺山修司の実験映画を、手軽に見ることができるのは嬉しい。この6巻組ビデオには、上に名前を挙げた映画の他にも、本を2m離れたところから望遠鏡で読む男や、本を一字読むごとにその字を×印で消していく男が登場する『書見機』(1977年)、影が人を離れて別行動を取りはじめる『二頭女——影の映画』(1977年)、映画の中の女に夢中になった男の悲しい恋を描いた『一寸法師を記述する試み』(1977年)、寺山自身の「眼帯に死蝶かくして山河越ゆ」という句を母胎として生まれた『蝶服記』(1974年)、3面マルチスクリーンにそれぞれグリーン、ピンク、ブルーに染められた異なる映像が同時に投影される3分間の映画『青少年のための映画入

門』(1974年)など、興味深い映画がいくつも収録されている。

本館3階の映画関連書コーナーに置かれた『寺山修司 青少女のための映画入門』(ダゲレオ出版、1993年)は、これらの映画のための格好のガイドブックだ。「寺山修司実験映画の正しい上映の仕方」という文章は、それぞれの映画のための特殊なスクリーンや演出法を説明したマニュアルで、ビデオ版には何が欠落しているかがはっきりと分かり、そうした要素を想像で補うためのよすがになる。数人の書き手による寺山映画論にも説得力があり、かわなかのぶひろ氏の「寺山修司は、演劇においても映画においても、古典的なドラマツルギーの絶えざる破壊者だった。観客をドラマのとりこにするよりも、その意識を覚醒させ、思考させることに心血を注いでいた」という言葉や、マリア・ロベルタ・ノヴィエツリ氏の「観客は、たしかに映像のフィクションに直接巻き込まれることはなく、スクリーンの前にじっと座ってはいるのだ。しかし、動き回っているのは、実のところ観客自身なのである」という言葉を頭に詰め込んでビデオを見れば、楽しさは倍加するかもしれない。

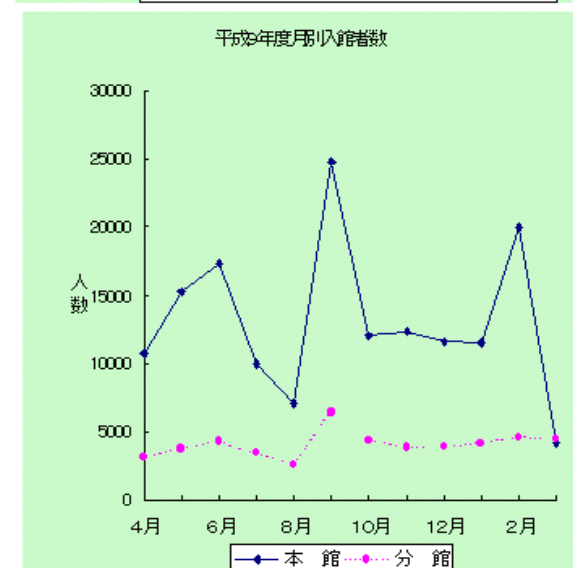
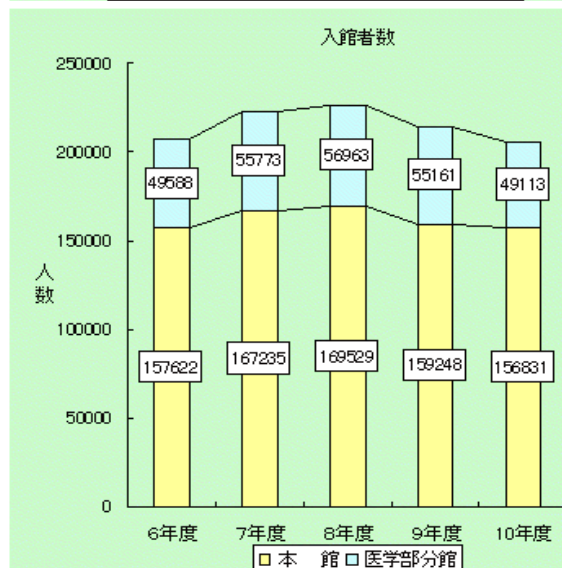
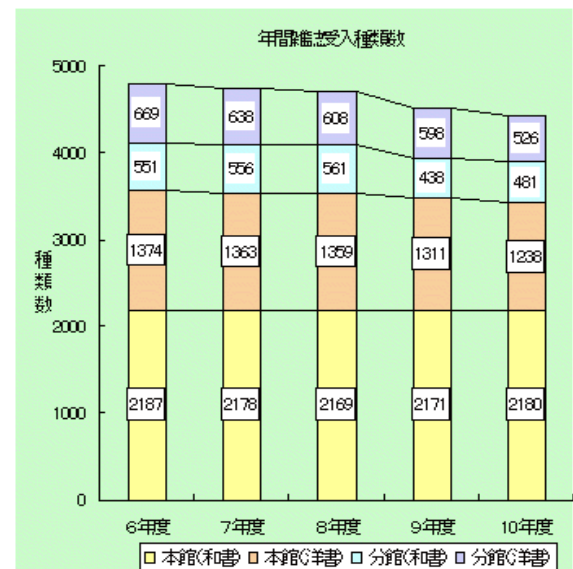
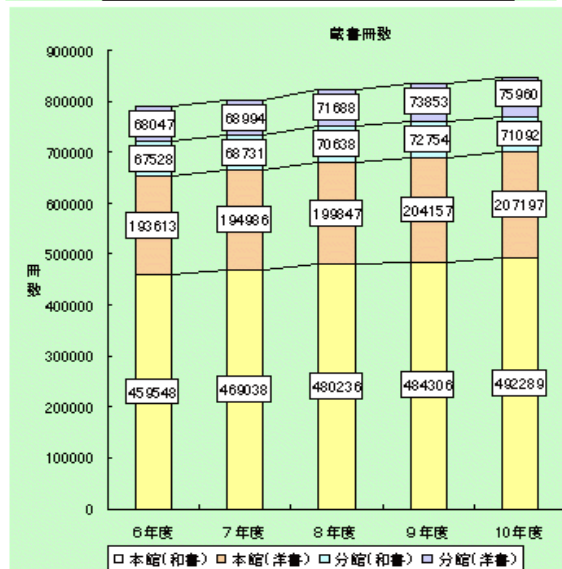
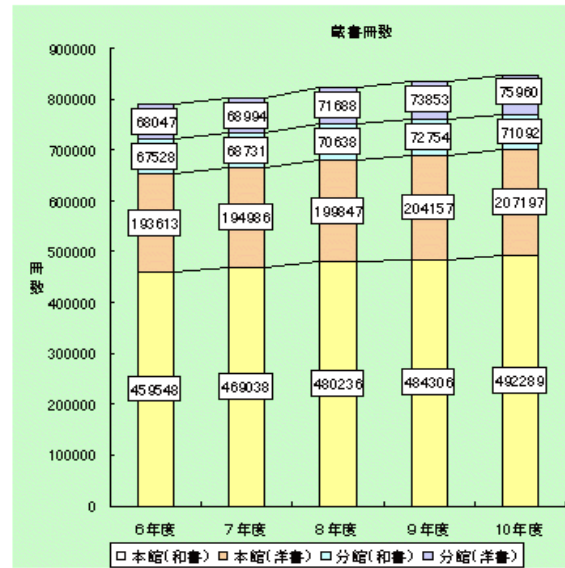
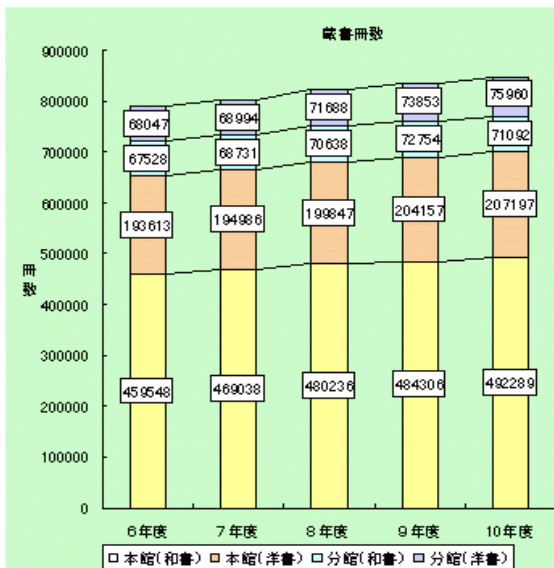
なお、寺山が撮った実験映画の代表作『トマトケチャップ皇帝』(1971年)は、子供たちが大人の管理に反逆して一斉蜂起する話だが、この6巻組ビデオには27分の短縮版しか収録されておらず、字幕がドイツ語で表示されることもあって、筋を追うのが非常に困難になってしまっている。のちに同じシリーズの第7巻として出された105分の『トマトケチャップ皇帝』オリジナル・ディレクターズ・カット版は、残念なことに館蔵されていない。しかしその内容は、映画雑誌『イメージフォーラム』のウェブサイト内にある『トマトケチャップ皇帝』のページに再録されているので、このページを覗いておおよその内容を把握してからビデオを見ることをお勧めする。

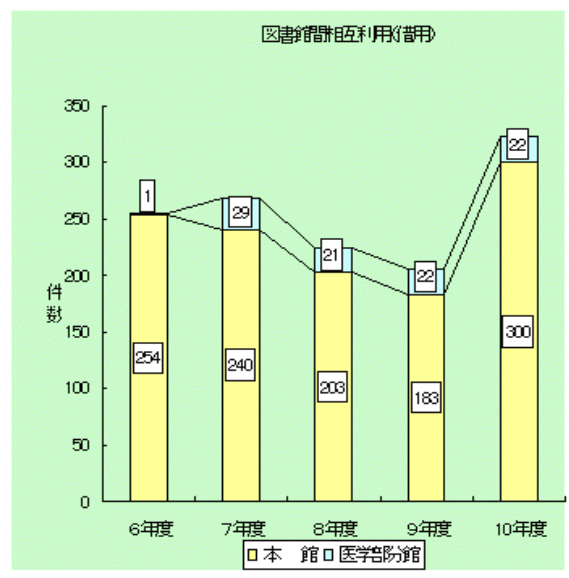
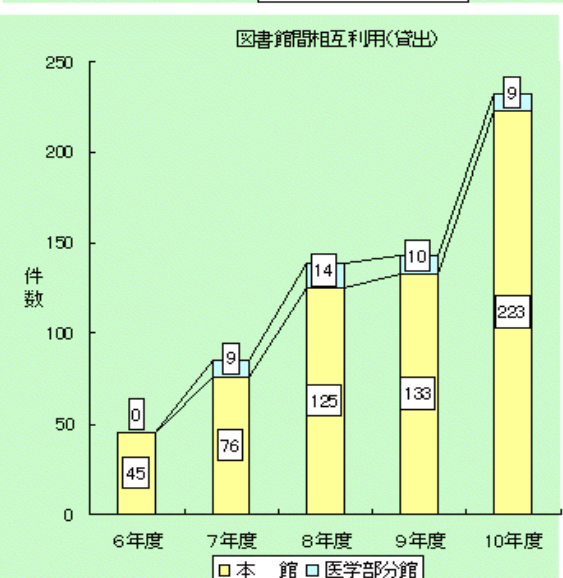
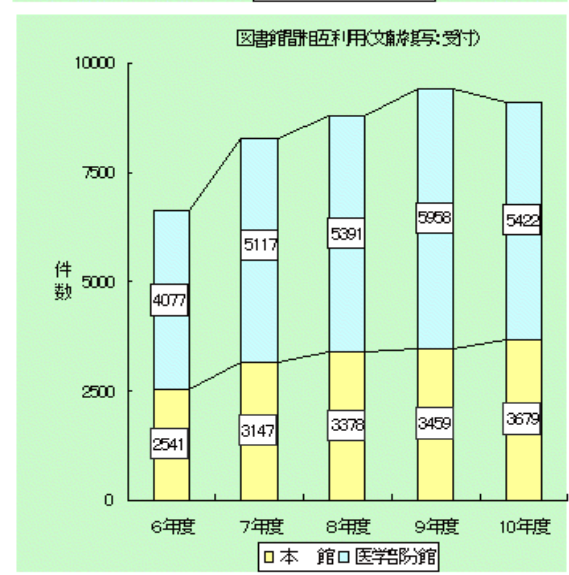
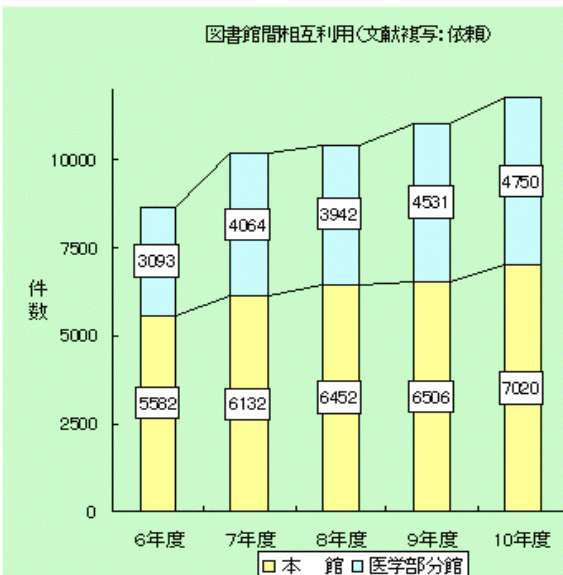
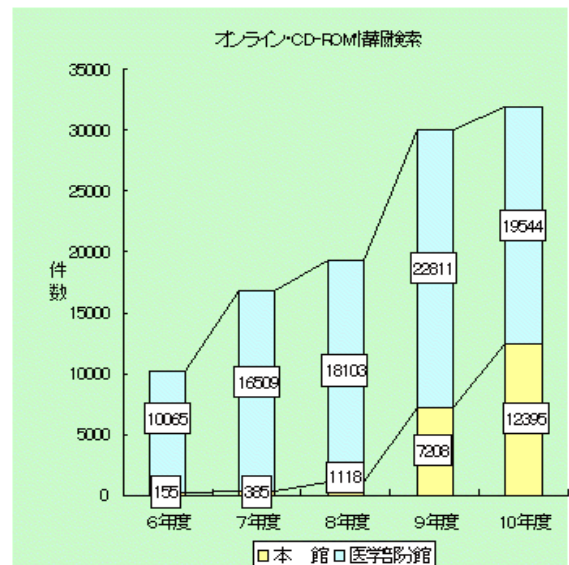
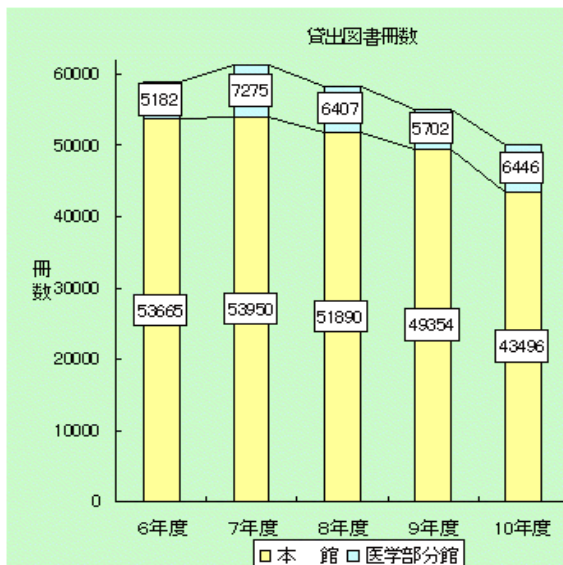
この文章を読んでもくださっているあなたは、検索エンジンでこのページにたどり着いたのでなければ、岐阜大学の関係者のはずである。興味を持っていただけたなら、近いうちに機会を見つけて、ぜひこのビデオをご覧になっていただきたい。これまでに経験したことのない、図書館でのもう一つの遊び方が見えてくるはずだ。

(うちだ まさる:地域科学部講師)

グラフで見る附属図書館統計

平成11年度末現在で過去5年間の資料の所蔵状況及び利用動向の各種統計をグラフで表しました。





図書館の利用

川端 邦裕

学生はもちろん、教職員、研究者等いろいろな人々が図書館を利用する為に出入りしています。私自身、文献検索や、雑誌の複写等しばしば利用しています。思うに、図書館は書物・雑誌を媒介として、国の内外を問わずまた時間を超えて人々との交流を可能とする場なのです。最近インターネットの利用により、図書館で瞬時に情報交換が可能となっており、その交流の場はますます拡大してきたといえます。紙に印刷された文字との出会いばかりでない場の提供は、現代文明社会の反映とでも言えましょうか。

ところで、日本の有名な御伽噺の中には、現実と遊離した異界が描かれることが多いものです。「浦島太郎」の竜宮城しかり、「桃太郎」の鬼ヶ島しかりです。たとえば浦島は、亀に連れられ竜宮城へ行き、帰ってくるとかつて住んでいた村はなくなっています。お姫様からもらったお土産の玉手箱を開けると、白い煙とともに浦島はおじいさんになってしまう……。かくして竜宮は現実の世界とは離れた異界となるのであり、それ故に浦島は現実の世界に戻らざるを得なかったのです。

図書館というのも、ひょっとして一種の異界なのかもしれません。図書館への出入りは自分の知らない情報の世界への出入りであり、時には過去の人々との対話をし、時には数万キロも離れた人々と生を共有することができる場であるのです。その交流の時こそ、我々は新しい事実の発見に喜び、先人の偉大さに感銘しつつも、新しい発想の為のエネルギー足り得るのです。その点において、図書館という場における存在形態があり、ある意味でそれは現実と異界との出入りであると同時に、自らが交流を作り出す積極的営みの場でもあるのです。

従って、その存在は交流という瞬時にのみ現れます。それは情報の流れであり、其処を強調して曰く、“The first shall be last; and the last shall be first.”

(かわばた くにひろ:医学研究科大学院生)

Letter to the library

Hagos Hadush Seged

Library is one of the basic and most important parts of Universities, Colleges, Schools, etc. used to promote education. Library plays an important role in providing the community of a given educational institution with large collection of books, periodicals and other very important materials. To achieve the above-mentioned goal, Gifu University has, thus, established a well-organized university system for the faculty members and students.

I joined Gifu University in October 1996 as a student of Civil Engineering. In a couple of months, members of the University international students center introduced us (other foreign students and myself) with the highly cooperative librarians and showed us the general view of the library. Later on, a senior foreign student friend of mine showed me in detail the civil engineering books and periodicals section. Since then, I have been using the library as one of the main sources of knowledge during my study time.

The library is opened from Monday to Saturday, which, I think, is quite ample time for use. The Library adopts the system of the so-called open-stack, which enables faculty members and students to browse freely among book stacks. One of the main features of the library is that the library has been automated in almost all library functions. For example, the university OPAC system is very helpful to easily search for books or periodicals using the University Internet home page without going to the library. The OPAC enables us to access catalogue database of periodicals and books and helps us not only locate the publication materials of our choice in the library, but also obtain their detail bibliographic data, and relevant information about them such as back issues and current status.

Gifu University library has its own rules on how to borrow books. I took the following summary from the library home page:

Undergraduate students 5 books for up to 2 weeks

Graduate students 7 books for up to 2 weeks

Faculty members 7 books for up to 2 weeks

Non-university members 2 books for up to 2 weeks

For comparison purpose, I have also collected similar rules from Kyoto University library as shown below:

Faculty member 30 vols. 1 month
 Professor emeritus 10 vols. 1 month
 Non-teaching member of staff 10 vols. 1 month
 Graduate student 10 vols. 1 month
 Undergraduate student 5 vols. 2 weeks

I think the total allowable number of books to be borrowed by graduate students (where I belong to) of Gifu University is enough, but the time span of only 2 weeks is short.

The library consists of many foreign books and periodical (mainly in English) that can be used by foreign students. However, most of the books, which are inside the library shelves are old ones. Perhaps, several new books could be with professors and faculty members; and it is good that it is possible for us, students, to borrow any book at any time from any faculty member. Nevertheless, it is not easy to know what kinds of books are available or not.

Before I finish my letter to the library, I would like to express all my thanks to the very helpful and hospitable librarians, who always make the library easy for us to use.

(ハゴス ハドウシュ セゲド:工学研究科生産開発システム専攻大学院生DC1)

職員の異動 平成11年7月～10月

異動月日	内容	氏名	現所属等	前所属等
7月 1日	採用	澤島 幸子	情報管理課資料受入係	

お知らせ

・SD(Science Direct)－21について

岐阜大学がエルゼビア社と契約している雑誌及び非購読誌をインターネット上でダウンロードできるサービス(SD(Science Direct)－21)が下記の要領で利用できるようになりましたのでお知らせします。

- 1 利用期間は1999年12月31日までです。
- 2 岐阜大学内でのみ利用可能です。
- 3 1998年度及び1999年度に購読のエルゼビア社の雑誌は、Table of Contents, Abstractsからフルテキストのダウンロードまで無制限に利用できます。
- 4 1998年度及び1999年度に非購読の雑誌は、Table of Contents, Abstractsを無制限に(無料で)見ることができます。但し、フルテキストのダウンロードについては制約があります。年内に岐大全体で利用(ダウンロード)できる件数が決まっています、制限以上の利用はストップされます。従って、非購読誌フルテキストの利用に際しては、全学の利用者のことを考慮に入れてご利用下さるようお願いいたします。非購読誌利用対象件数は、2,773件です。
- 5 ユーザ登録をすると、Personal Journal List の作成等、個人用にカスタマイズすることができます。ユーザ登録の詳細は、下記URL内項目5をご覧ください。(学内専用)
<http://www.gifu-u.ac.jp/~gulib/opac/SD21.html>

9月24日にエルゼビア社によるSD-21説明会を柳戸及び医学部キャンパスで開催しました。(参加者約50名)SD-21説明会当日の配布資料の残部がありますので、必要な方は学術情報係(内線:2193)にご請求頂ければ研究室にお送りします。

岐阜大学附属図書館報「寸胴」第29号 1999年12月 6日

編集：館報編集委員会(編集委員長：宇野 尚雄)
 発行：岐阜大学附属図書館
 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1 TEL058-293-2184